

原著 (Article)

音楽物語「笛を吹いた竜」

Story with music for Woods Winds Quartet
「The Dragon playing flute」

渡邊 康*
WATANABE, Koh*

キーワード：音楽物語、謡、囃子、コンピューター浄書

Key words : Story with music, 《chant》 a NOH song, musical accompaniment, computer notation

1. はじめに

筆者は物語と音楽を結びつける作品として、実演奏による音楽物語の作曲を研究の柱においており、その成果として木管五重奏編成による5曲の作品を発表した。「三びきのやぎのガラガラドン」(平成10年3月)「クリスマスのおくりもの」(平成10年12月)「よだかの星」(平成12年3月)「笛を吹いた竜」(平成13年10月)「幸福の王子」(平成18年2月)である。

それぞれの作品での演奏は初演以来、木管五重奏団アンサンブル・モックによって「三びきのやぎのガラガラドン」の約110回をはじめ「よだかの星」の約30回などの再演を重ねている。これらの楽譜は未発表であり、また多くの改変を重ねたものや散逸したものもあることから、これまでのまとめとして楽譜ワープロによる浄書を試みた。今回の浄書楽譜「笛を吹いた竜」は、平成13年に堤剋喜原作の物語に木管五重奏の楽曲を加えたものである。2001名古屋市民芸術祭参加公演のプログラムで初演された。

2. 楽曲の特徴

日本の民話を基礎に持つ物語に対して、日本の伝統音楽の素材と手法を取り入れる作曲とした。能楽囃子の五線楽譜化に関する研究を進めていたこともあり¹⁾、能楽の音楽部分で特徴的な旋律とリズムを持つ動機、例えば「お調べ」「中の舞」「早舞」「次第」「神舞」の断片を動機(旋律の材料)として用いている。それを日本伝統の5音階とヘテロフォニーの手法、動機の変奏原理、転調手法によって構成した。かけ声や太鼓類の表現は、楽器の音塊で表現している。

3. 問題点

前述の方法による作曲構成は、あくまで西洋音楽のアカデミックな手法かその拡大である。しかし能の音楽はその構成法において西洋音楽の音組織論とは異なった日本の伝統的な組織論（決まり事）によっている。しかし「笛を吹いた竜」では作曲のベースになる手法は西洋音楽そのものである。ここに能の音楽の伝統的な方法を用いることが出来ていない状態である。日本の伝統的な音組織論を西洋音楽的の作曲に統合することは困難である。それは決まり事が非常に複雑であり、日本の伝統芸能の流派別の口伝として伝えられるので、部外者には理解しにくい面があるからであるし、音階や拍節構造が日本音楽と西洋音楽ではかなり異なり、それぞれが高度な内容であるので互いに理解困難である。「笛を吹いた竜」の作曲の時点で筆者はまだ深い理解を得なかった。

これまでも戦後の日本の作曲家が日本伝統の音組織と音節感覚で西洋音楽との融合的な作曲を試みてきたが、親しみやすい領域の作品には帰結していないと思われるし、未開拓の領域があると思われる。

4. 課題

しかしながら近年学校教育の場で日本伝統音楽を採り入れられたこともあり、その全貌を説明する試みが現れてきた。中学高校の音楽の教材として能が採り上げられていることが追い風となっている。

能を音楽の領域でみれば、能の音楽は謡（声楽）と囃子（器楽である能管、小鼓、大鼓、太鼓）の演奏体からなる。謡いのリズム型には、拍子不合、拍子合、サシノリ、詠ノリ、平ノリ、中ノリ、大ノリの概念がある。音組織にもヨワ吟とツヨ吟がある²⁾。それに対して囃子にも決まり事があり、さらに謡と囃子がある時は共同し、合わせないという形で同時に演奏するなど複雑な動きをする。こういった基本的な能の音楽の構成原理の説明がなされているので、これを実際に照らし合わせて確認する作業が必要である

次にこの確立されている音楽構成上の概念が実際の曲の物語としてどのように用いられているか、つまりどういった場面でどのような音楽がどのような音楽語法で用いられているかの分析を行う事が必要な課題である。実演では流派の違いや、即興の場面も多くあるのが普通なので、複雑に総合された全体をリズムと音階の面で分析するのは困難で、演奏を特定した上で解釈をも必要とすると仮定される。次の段階として、あらたな作曲に際して物語が意図するイメージをどのような能楽の語法を使って音楽として表現できるのかを決定することである。

能の音楽とその語法が、能の筋書きにどのような関連があるのかを調べ、その成果から西洋音楽を基礎とした音楽物語を新たに作曲することは、日本音楽と西洋音楽の

比較検討による互いの理解の深みと広がりにつながるはずである。

■注

- 1) 渡邊康・飯塚恵理人・一色忍「能楽囃子の楽譜化と情報機器を用いた囃子の説明について(1)」
～＜中ノ舞＞＜神舞＞を中心に～. 相山女学園大学生活科学部生活社会科学科紀要「社会と情報」,
第3巻1号:32-41.
- 2) 石澤真紀夫(編著)「2012年度改訂版 中学校・高等学校教職課程音楽科教育法」, p.115, 教育
芸術社.

笛を吹いた竜

渡邊 康

♩ = 124

Piccolo

Flute

Oboe

Clarinet in B \flat

Horn in F

Bassoon

♩ = 72

Piccolo

きこりの八郎は笛が好きな若者だった

12

mf

f 笛を吹きながら家を出て、笛を吹きながら帰ってくる。

mf

mf

3. 村人は朝、笛の音が聞こえると「八郎がでかけるな」と思った。

p

19

ff

f

ff

mf

mp

p

夕方、笛が聞こえると「八郎が帰ってきたな」と思った。

その朝も、八郎の笛が聞こえた。

f

p

♩ = 112

28

p

p

f

「こりゃおごちそうだ！」

八郎が小川を渡っていると、岩魚がざくざく泳いでいる

37 こりゃすごい！
こりゃおごちそだ！

八郎は岩魚をさくさく焼って焼き、
むじゃむじゃたいらげた

こりゃ うまい！
おごちそだ！

こりゃ うまい！
こりゃこりゃ
うまいぞ！

Flute

45 *mf*

mp

p

f

mp

51

mf

mf

p

f

57

mp

f

mp

p

mf

57

f

mp

p

mf

63

mf

mf

mf

mf

mf

70

rit.

molto

f

mp

p

ppp

mp

f

mp

p

ppp

mp

f

mp

p

ppp

mp

f

mp

p

ppp

mp

f

mp

p

ppp

八郎は腹がいっぱいになって
すっかり寝てしまった。

80

♩ = 96

Piccolo

♩ = 112

accel.

f

f

mp

with Mute

ffz pp

ffz

mf

どこからか声がした
ような気がした。

水に映る竜の姿にびっくりした。

八郎は逃げ出した

岩魚を全部食ってしまうとは
けじからんやつだ。

八郎ははつとして飛び起きた。

90

♩ = 108

mp

f

pp

ff

p

mf

The image shows a musical score for the song "The Rose Tree". It is a four-part setting for voices and piano. The key signature is one sharp (F#), and the time signature is 4/4. The score is divided into two systems, each with six measures. The first system is marked with a tempo of "moderato" and a dynamic of "f". The second system is marked with a tempo of "rall." and a dynamic of "p". The vocal parts are Soprano (S), Alto (A), Tenor (T), and Bass (B). The piano part is marked with dynamics of "f", "mp", and "p". The score includes various musical notations such as notes, rests, and articulation marks.

molto rall. $\text{♩} = 58$

127 八郎は気がついた。
自分が
竜になってしまった
ことを

127 八郎は悲しんだ。
このままずっと竜のままで人に
戻れなかったら
いったいどうなってしまうのだ

127 八郎は悲しんだ。
笛もなくなっていた
笛が吹きたい。 ああ 笛が吹きたい。

mf *p* *p* *mf*

137

143 八郎は笛を作った。
しかし、
笛は鳴らなかった。

何度か笛が積もり融けた。

143 作っては壊し、作っては壊し。
八郎は笛を作り続けた。

p *p* *p* *p*

$\text{♩} = 72$ *Piccolo*

152 *pp* *mf* *f* *mf* *sfz*

152 *pp* *pp* *pp*

152 *pp*

♩ = 80 *poco a poco accel.* *poco a poco accel.*

162 *mf* *mp* *p* *mp* *mf*

童の音が久しぶりに村に響きわたった。

八郎の笛だ！

八郎に違いない

162 八郎の笛だ！

162 八郎の笛回しだ！

ある日、村に笛の音が聞こえてきた。

♩ = 124

172 *f* *mp* *mf*

八郎が帰ってきたぞ

180 *mp* *mf* *p* *f*

186 *f* *mp* *f* *pp* *ff* *pp* *p*

[illegible]

The musical score for 'The Rose Tree' is presented in a five-staff format. The first staff is the vocal line, featuring a melody with a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The second staff is the piano accompaniment, starting with a mezzo-forte (mf) dynamic. The third staff is a second vocal line, also in F# major and 3/4 time, with a mezzo-forte (mf) dynamic. The fourth and fifth staves are additional vocal or instrumental parts, with dynamics ranging from mezzo-forte (mf) to fortissimo (ff). The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings.

The image shows a musical score for the song "The Rose Tree". It is a four-part setting for voices and piano. The score is written in 2/4 time and features a key signature of one sharp (F#). The vocal parts are arranged in four staves, with the soprano part at the top and the bass part at the bottom. The piano accompaniment is shown in the bottom two staves. The score includes a variety of musical notations, including notes, rests, and dynamic markings such as *p* (piano) and *f* (forte). The lyrics "The Rose Tree" are written below the vocal staves. The score is divided into measures by vertical bar lines, and the measures are numbered 217, 218, and 219. The score is a page from a larger document, as indicated by the page number 217 in the top left corner.